

令和4年 第10回総務経済常任委員会会議録

令和4年6月8日 議員控室

○事 件

所管課報告事項

- (1) サーモン養殖試験事業の進捗状況について（サーモン推進室・産業課）
- (2) 株式会社青年舎大関牧場の稼働状況について（農林課）
- (3) 令和3年度ふるさと応援寄附金の実績について（政策推進課）
- (4) 予約バスの実証運行について（政策推進課）

協議事項

- (1) 付託のあった請願書の審査

その他

- (1) 肉牛のついでの情報提供

○出席委員（8名）

委員長	安 藤 辰 行 君	副委員長	牧 野 仁 君
	横 田 喜世志 君		大久保 建 一 君
	関 口 正 博 君		倉 地 清 子 君
	宮 本 雅 晴 君		三 澤 公 雄 君

○欠席委員（0名）

○出席委員外議員（4名）

議長	千 葉 隆 君	赤 井 睦 美 君
	佐 藤 智 子 君	斎 藤 實 君

○出席説明員（15名）

サーモン推進室長	田 村 敏 哉 君	推進係長	松 田 力 君
産業課長	吉 田 一 久 君	水産技術主幹	田 畑 司 男 君
再任用職員	黒 丸 勤 君	水産課長	田 村 春 夫 君
農林課長	石 坂 浩太郎 君	農林課長補佐	宮 下 洋 平 君
農業振興係長	高 嶋 一 登 君	政策推進課長	川 口 拓 也 君
政策推進課長補佐	上 野 誠 君	企画係長	多 田 玲央奈 君
政策調整係長	右 門 真 治 君	企画係主任	長谷川 佳 洋 君
企画係主任	齋 藤 彩 君		

○出席事務局職員

事務局長	三 澤 聡 君	事務局次長	成 田 真 介 君
------	---------	-------	-----------

[開会 午前10時00分]

◎ 開会・委員長挨拶

○委員長（安藤辰行君） おはようございます。

それでは第10回総務経済常任委員会を開催いたします。委員長挨拶は割愛します。今日はお集まりいただきましてありがとうございます。

【サーモン推進室・産業課職員入室】

◎ 所管課報告事項

○委員長（安藤辰行君） 報告事項4点、協議事項、その他とありますけれども、できれば午前中に終わりたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

それでは、早速1番目、サーモン事業についての報告をお願いいたします。

○産業課長（吉田一久君） 委員長、産業課長。

○委員長（安藤辰行君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） それでは、サーモン推進室と産業課のほうから、サーモン養殖試験事業の進捗状況についてということで、ご報告させていただきます。

まずは一点目の二海サーモン熊石地域の水揚げ結果ということで、私のほうからご報告させていただきます。

資料の1番になりますが、こちら1ページ目については、これまで過去の1年目、2年目の水揚げの状況について記載してございます。今回の報告については、今年5月12日に熊石地域で全て水揚げしてございますので、その結果についてご報告させていただきます。

資料のほうは2ページ目になります。3年目となる熊石地域でのトラウトサーモンの養殖試験事業ですが、昨年11月6日に4,000尾ということで、種苗を入れさせていただきましたが、最終的にこの飼育期間中にへい死した数、それと最後に水揚げした数、それら考慮いたしまして、当初は3,906尾のスタートの尾数になってございます。重量については、2,590.08kgということでございます。11月5日に青森から種苗を搬入して、翌日に今回新たに整備した20mの円形生簀に収容したところでございます。5月12日に全量水揚げしましたが、その間の飼育期間については、188日ということで、これについては過去3か年の中で一番長い飼育期間ということになってございます。これは種苗も供給先のほうの都合もございまして、過去2か年は12月の中旬あるいは下旬に種苗を入れさせていただきましたが、昨年については11月の中旬に入れたことによるものでございます。

5月12日までの飼育期間中にへい死した数については379尾、またその間に測定を、中間測定ということでサンプル抽出をしまして、3回ほど調査したのと、その他、いろいろサンプルということで全体として21尾、合わせて400尾がへい死したということで、それで5月12日の水揚げは全体で3,506尾ということでございましたので、生残率については89.75%という結果になってございます。ほぼ9割方、生存できたという状況でございます。

こちらの中段に表が載ってございますが、それぞれの重量区分ごとの表になってございますが、このたびの水揚げについては数が大変多かったということで、1尾ずつ重量を計測

できたのは全体として910尾、これを1尾ずつ計量しまして、それ以外のものについては、籠に7尾まとめて一括して重量を計算したということから、一応、全体として重量組成はあくまでも推計値ということですが、この推計値については、お手元の資料の4ページ目に江差の水産普及指導所さんのほうで、まとめたグラフがございますので、そちらのほうをご確認いただきたいと思います。平均体長についてはサンプル抽出の中での平均体長ですが46.3cm、平均体高が17.8cm、平均重量、これは全体の重量を総匹数で割って3.36kgという平均重量になってございます。また最大重量の5.15kgは910尾、1尾ずつ重量計測した中での最大のものが5.15kgであったということでございます。また、最小重量も600gというのが最小の重量でした。

今回、3年目の成果としては、2年目より若干平均重量も上回ってございますし、生残率も若干上回ったところですが、今回、3年目の試験の成果として特筆するべきところは、こちら増肉係数という数字、載せてございます。今回、3年目にして1.7という数字ですが、過去この増肉係数がどういった数字だったかという、1年目が2.13、2年目が2.63ということで、この数字は、要は魚を1kg増やすために使った餌の重量ということでございます。これが今後の養殖の事業を進める中で、経費に跳ね返る部分で、これが重要なのかなと。

この3年目の開始にあたりましては、初めて餌のコントロールをして今回臨んだという、その成果が十分発揮されたのかなと。そのように考えているところでございます。一応、増肉係数、一般的にちょっとトラウトサーモンの数字は持っていないんですけども、銀鮭だと1.5から1.6という数字ですので、ほぼ今の飼育環境の中においては良好な成績だったのかなと、そのように今年度の状況につきましては総括しているところでございます。

一応、私のほうから熊石地域におけるサーモンの水揚げの結果ということで、ご報告は以上でございます。よろしく願いいたします。

○委員長（安藤辰行君） ありがとうございます。

今、説明をいただきましたけれども、何かご質問はありませんか。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 三澤さん。

○委員（三澤公雄君） ちょっとごめんなさい。聞き逃したんですけども、最後に増肉係数の話をされましたが、この間の飼育日数というか、日にちはこの1年目、2年目、3年目でどういうふうに変遷していますか。

○産業課長（吉田一久君） 委員長、産業課長。

○委員長（安藤辰行君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） まず、飼育日数でございますが、熊石地域の1年目は令和元年度12月14日から始まりまして、6月1日に全量水揚げしてございます。この間については171日間ということですが、

また2年目は、種苗の搬入時期が大幅に遅れて12月26日になりまして、2年目も6月1日に水揚げしましたので、この間の飼育日数は157日。3年目については、11月6日に開始して5月12日の水揚げということで、この間は188日間ということですが、過去3年で一番長い飼育期間だったのかなと。1月の下旬に種苗を入れられたということは、ある意味6月の下旬までマージンが得られるので、そういったこともあって餌の調整というのを積極

的にやってみようということで、3年間テーマをおいてやったところがございます。よろしくお願いたします。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 三澤さん。

○委員（三澤公雄君） ということは、いわゆる増肉係数が増体1kgに何kg飼料を使ったのかは、飼育日数が長かったけれども、ものすごく経済的にやれたという数字ということですよ。わかりました。

○委員長（安藤辰行君） ほかに。

○委員（大久保建一君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 大久保さん。

○委員（大久保建一君） 今回の採算性に関する数字は一切ここに出てきてないんですけども、その辺、わかる数字があるなら、販売も結構しましたよね。その辺の売価だとか餌をどれくらいやったかはわかるんですけども、どれくらいか、その辺を教えていただきたい。

○産業課長（吉田一久君） 委員長、産業課長。

○委員長（安藤辰行君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） まずは、かかった経費の部分からご説明させていただきますが、単純に種苗の総重量が2,590.08kgの重量でして、種苗代金がキロ1,080円ということでございます。こちらのほう種苗代金が279万7千円。またこの種苗を青森から運ぶのに20tトレーラー3台使用して、これらの輸送費が165万円、合計で447万円が種苗代というかたちになります。

あと、餌ですが、これは1万5,640kg給餌してございまして餌についてはキロ195円×消費税ということで、335万円。あと種苗代と合計して779万7千円ですが、あとその他もろもろの消耗品のなものは、おおよそフォークリフトの借り上げ等で20万程度かかっていますが、おおよそ800万円程度の経費だったのかという状況です。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（安藤辰行君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 今の3年目の経費に対して、売り上げのほうでございます。熊石地域の売り上げに関しては、浜値としてキロ当たり755円というかたちになっております。金額的にはトータルで800万7,658円というかたちになっております。

○委員（大久保建一君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 大久保さん。

○委員（大久保建一君） 浜値ってほしいこんな感じなんですかね、これからも。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（安藤辰行君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員の皆さんご承知のとおり、トラウトサーモン、特に北海道内での養殖は八雲町からスタートしております。そういった中で、ほかの地域でも続々と参入しているわけです。全国的にはもっと進んでおりまして、ご当地サーモンという名でかなりの地域で進んでおります。値段については、非常に、特にサーモン、サケマス類に関しては市況の影響を受けやすいというかたちで、今はちょうど、ロシア、ウクライナ紛争などもあって、なかなか入って来ておらず、全体的に物価高になっていますが、サーモン

の値段に関しては幅があります。755円という値段が高いか安いかというと、非常にまだ微妙なところでして、高い場合にはものによるんですけども、4桁、千円以上になる場合もありますし、安い場合は500円以下もあります。

今後、これまで3年間というものは、正直に申し上げますと模索期といいますか、手探りの状態から始めて、ここまで漁協のサーモン養殖部会、あるいは、ほかの皆様方のご協力を得ながら進めてきましたので、この令和4年度からは、本格事業化に向けた第2期の取り組みとして、当然、値段も価格も考慮しながら取り組み、収支も精査しながら取り組みを進めていかなければならないと考えているところでございます。以上です。

○委員（大久保建一君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 大久保さん。

○委員（大久保建一君） 今のところ、目標が定まっているのかわかりませんが、今のところでは、令和3年度でいけば、800万かけて800万の売り上げですけども、最終的にこれはどれくらいの利益率を目指していくんですか。どれくらいで商売になるって感覚ですか。そこまでまだ出していませんか。

○産業課長（吉田一久君） 委員長、産業課長。

○委員長（安藤辰行君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） 利益率については、先ほどの室長からお話があったように、やはり浜値がいくらになるのかで大きく左右されますが、将来的に今の国内のサーモン流通状況を見ますと、依然として外国産のものが大きいということでございます。そういったものに負けない体制を作っていきたいということですが、やはり現状として円安の中で外国産のものであっても4桁する状況になっているように聞いてございますが、通常であればだいたいキロ800円から千円程度かなと。そういった中でどういった利益を出すのか。やはりその部分では種苗代金をいかに経済的に抑えられるか。あるいは今回、青森から持ってきているので165万円の輸送費かかっていますが、これらをどう圧縮するのか。そういったことで地元の種苗の生産が必要ということで現在動いているところでござ3います。

一般的に養殖の部分については、こういった経費をいかに抑えて、いかに高く売るかですが、理想といたしましては1尾当たり500円程度の利益をいただきたいと。そうすると単純に今回4千尾入れて500万ですから、1期として200万、それくらいは最低ほしいと。これは我々というか、こちらの希望ですけども、そこはさらに向上できるような、経費の圧縮をどうするか、それはいわゆる養殖技術をどう向上させるか。あるいは今の種苗を、成長の良い優れた種苗をいかに確保して漁業者に提供するか、こちらにかかっているんだろうなと。

そういった中で今現在としてどの程度の収入を見込みたいとか、ある程度、目標を定めるのはまだまだ早い段階かもしれませんが、思いとしては今言ったように最低でも1尾から500円程度の利益を上げられるような中身にしていけたらなと考えてございますので、よろしく願いいたします。

○委員長（安藤辰行君） ほかに。

○議長（千葉 隆君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 議長。

○議長（千葉 隆君） この事業の部分でいうと、全協で町長が、8月までにはある程度、次のステップに向かうということで、議員のほうからも、ある程度、採算性も含めて、具体的な本格的な事業に向けて、一つの区切りとして議会のほうにも示して、判断するということが一つあると思うので、あと、2か月ですよ。だから、今言っていた高騰の部分も、やっぱりある程度、数字出して、試験操業だから、そこで試験やっている中で、採算性合わないのは当然だと思うんだ。まだ本格操業じゃないから。それから未知の部分もあるだろうし。

だからそういった部分でいえば、今も人件費の部分が出てないから。教えてもらってないから。800万でもきっとマイナスなんだよね。餌を与える部分の人件費が出てないから。それはそれで恐れることはないんだわ。マイナスならマイナスの部分出して、そこをもう少し、本格営業するけれども、2、3年採算性合うためには、その部分を研究するためにやるとか。そういうロードマップ作っていくことのほうが大事だし、何が問題なのかという部分をきちんとしていくということが一番重要だと思うんだわ。

そのうえで8月の段階で判断して進んでも、また良くなる場合もあるだろうし、悪くなる場合もあるだろうし、8月の段階でやめるかもしれないし、どういうふうになるかわからないけれども、やっぱりそういう、ここに課題があるんだよ、あともう一つこっちにも課題があるんだよって。それで、飼育の部分もそうだけれども、要はふ化事業で安く買えますよと。輸送コストがかからないからって。でも、ふ化事業で赤字になったら、またそれもどうなのよって話になるわけだ。だからその辺、やったけれども合わない部分のふ化事業をやっぱり輸送費かけてもやりますよっていうふうに最終的になるかもしれない。それくらいの実証実験を今やっているだろうし、チャレンジしてるわけだから、その辺の課題とかいう部分もきちんとして数字で出して、書面で出してやっていかないと、なんかあやふやというか、疑心暗鬼の中で進むだろうし、明確化になっていないと思うので、そういった販売の部分とかも逆にこっちの太ってるだとか痩せてるという重量より、価格とかのほうがみんな興味あるし、事業だからやっぱり。そのところは常に前面に出してやっていったほうがいい方向に行くと思うんだよね。

その辺、今日も、前もそうだけれども、価格のことを言っていて、お金の話を言っていて書面で出てこないという部分があるので、やっぱり今、口頭で言ってもすらすら出てくるから、明日でもコピー出してもらって、全員に配ってさ、共通の認識を持って、課題があるけれども、ここの課題に挑戦するんだという方向も必要だと思うんだわ。ただ駄目なものは駄目って判断するかもしれないし。その判断材料がなかなか我々に伝わってこないから、今の数字とか、それから課題みたいな部分も含めてあるのであれば、次の時にもう少し明確化していかないと、なんとなくわかりづらい感じがするんですけども。ちょっとその辺、こっちよりこっちで意見をまとめて出してもらおうなら出してもらおうというふうにしてもらえたらいいかなと思います。

○委員長（安藤辰行君） どうですか、その辺。

○委員（大久保健一君） 出してもらわないとどうにもならない。

○委員長（安藤辰行君） そしたら、ある程度出してもらって。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（安藤辰行君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 今、まさに委員からご指摘がございました点、私も4月にこちらに来てから気にかけている点でございます。この4月から種苗生産施設を道から購入させていただいて、このあと、ご報告させていただきますが、その部分のコストも精査しながら、今8月と。去年の委員会、議会において町長からロードマップ的なものを示し、判断材料をとという話があったということは私も町長から伺っておりますので、その部分を含めて、もう少し若干お時間いただいて、ペーパーで資料を提示させていただき、ご審議いただくようにさせていただきたいと思っておりますので、ちょっとご容赦していただけたらと思います。

○議長（千葉 隆君） とりあえず、今日行ったやつだけでも明日にでもコピーください。

○委員長（安藤辰行君） よろしいですか。ほかに。ありませんか。

（「なし」という声あり）

○委員長（安藤辰行君） それではこれで終わりたいと思っております。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（安藤辰行君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） サーモン養殖試験事業の進捗状況についての二つ目でございます。八雲町熊石サーモン種苗生産施設の種苗搬入についてということで、一枚ものの資料になっております。資料2をご覧くださいと思います。

四角の囲みにありますが、令和4年5月26日木曜日、青森県から熊石産の種苗生産施設へ二海サーモンの稚魚を運搬し、同施設に搬入、収容したところです。

これまでは、青森県の事業者から購入したサーモンの幼魚を直接、熊石漁港の生簀に入れて海面養殖しており、今年11月についても同様の取り扱いとする予定でしたが、今年4月にサーモン種苗生産施設を購入したこともあり、種苗コストを下げることも考慮し、今回から稚魚で購入し、その施設で幼魚に育成したうえで熊石漁港内の生簀に入れることとしたところです。種苗生産施設への二海サーモンの搬入は当然、初めてでございまして、今後、十分に注意を払いながら育成したいと考えております。この稚魚を種苗生産施設で育成したうえで、今年11月頃に熊石漁港の生簀へ移動し、海面養殖を実施していくことを想定しております。

稚魚の搬入の概要ですが、青森県から20tトレーラー1台に搭載したサーモン稚魚を種苗生産施設へ搬入しました。搬入量等については、稚魚の平均重量が1尾当たり約24.8g、だいたい12～13cmの大きさです。総重量が555.9kgで、稚魚尾数は、1尾ずつ数えて持って来れませんから、単純に1尾当たりの平均重量と総重量で計算して、約2万2千尾というかたちになっております。稚魚代金については276万1,302円。内訳は、稚魚代が210万1,302円、輸送代が55万円、それから輸送技術代という部分で11万円というかたちになっています。

今後の想定スケジュールですが、先ほどご報告させていただきましたが、今年11月頃にサーモン種苗生産施設から熊石漁港の生簀へ移動し、海面養殖を行うこととしておりますが、これまで先ほどご報告したとおり、直接、漁港の生簀に幼魚を入れていたのが、今回は種苗生産施設で一定程度、幼魚まで育てたものを熊石漁港の生簀に入れるということです。当然、今の施設では淡水で育てています。これを海水に入れる、馴致という言葉ですけども、そういう海水に馴らして入れる作業が出てきます。

令和5年5月頃に二海サーモンを水揚げする予定でいます。なお、今年11月頃に熊石漁港へ二海サーモンの幼魚を移した後のことと思いますが、今度は稚魚から入れましたが、今度は卵を購入して種苗生産施設に入れて、ふ化させて、稚魚、幼魚と育成して、来年令和5年11月頃に熊石漁港の生簀へ移して、海面養殖を行うことを想定しています。また、先ほどご説明したとおり、当初は今年の11月に熊石漁港に入れる幼魚についても、直接青森県から幼魚を熊石漁港に入れる予定でしたが、種苗生産施設を購入できた、それから専門的に飼育できる専門家もいるということから、稚魚から育成することとして、それに伴って当初、想定していなかった備品等が必要となってくることから、今後、委員の皆様方にご審議いただき、予算の補正等が生じる可能性がありますので、その際はくれぐれもよろしくお願いいたします。以上でございます。

○委員長（安藤辰行君） ありがとうございます。何か質問はありませんか。

○委員（関口正博君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 関口君。

○委員（関口正博君） 先ほどの採算性の話もありますが、この種苗生産の技術、施設を含めて、これからの採算性を考えれば、大きく左右するところだと思います。この技術的なもの、海に出るまでの馴致までを含めて、技術的なことというのは、非常にハードルは高いものなのでしょうか。今、お伺いしている時点の話をちょっとお聞かせ願います。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（安藤辰行君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） ただ今のご質問、技術的な面も含めてですが、まず、二海サーモン、サーモンの、今回ニジマスになりますが、ニジマスも稚魚から、中間育成ですけれども幼魚まで育てていくと。だいたい700g前後くらいまで育てて海中に入れるということになりますが、やはりですね、怖いのが漁病という病気が発生すると、それが広がると、極端にいうと全滅します。ただ、今回、3月末まで北海道立総合研究機構の、さけます内水面試験場道南支場の支場長だった方が、そのまま八雲町に残っていただいて、研究者でもあり、技術者でもある方が、そこで直接携わっていただいておりますので、その部分については技術も経験もある方なので、今後、その部分では大丈夫だと考えています。

ただ、やはりこれも初めての経験で、実をいうと、これって全て初めての経験でございます。その施設から種苗生産施設から先ほど説明したとおり、淡水から海水に入れるって、いきなりできなくて、徐々に馴らしながら入れていくという部分では、それなりの技術や人手も必要になってきますので、その部分は研究しながら、十分注意しながらやっていかなければならないと考えております。以上でございます。

○委員（関口正博君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 関口君。

○委員（関口正博君） 試験という段階なのでいろいろなことが想定されると思います。どこの養殖も相当な歴史や時間をかけて今があるわけで、この二海サーモン事業も、ある程度長い目で見た計画性は一方でどうしても、議会もどうしても結果を求めてしますから、こういうことになってしまいますけれども、そういうのも必要だと思うので、本当、議長が言うように、ある程度怖がらず、いろんなことにチャレンジしていただきたいという僕の思いです。

それとある程度サーモンはブランド化とか、もろもろのお話があるでしょうが、ある程度スケールを求めないとないのは、所詮、サケはサケですから、単価の部分、これから北海道ブランドの話もあって付加価値がどれだけ付けられるかというところにも注力しているのも承知しております。ただ、ある程度量を求めなければならなくて、今回、幼魚2万尾でしたけれども、これから採算性を出したときに、この幼魚、種苗生産において最低限何万尾が採算ラインに乗るとか、そういう部分は、ある程度出ていますか。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（安藤辰行君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） まさに今の種苗生産施設の収支計算という部分についてですが、4月に購入して稚魚から入れて、たとえば青森県の事業者から入れてるんですが、そのコストの部分のどれくらいかかるのか、これから運営費も含めて、これから詰めて計算していきますので、先ほどお話ししましたロードマップも含めた中で、可能な限り明らかにさせていただけたらと考えております。

○委員長（安藤辰行君） ほかに。

○議長（千葉 隆君） 一点。

○委員長（安藤辰行君） 議長。

○議長（千葉 隆君） 先ほど言われたように、初めてのことから、設備、備品費もかかると言っていましたが、一度、総務でも一回視察に行って、状況を把握しないとないと思うので、その関係についてはまたお願いしたいんですが、ただの最初からわかっていることなので、相当、老朽化していると。だからある程度備品だけではなくて設備とかにもお金かけないとないとかということも当初から言われているので、その辺の関係も、ある程度予算組まないとないだろうし、当然、採算性といっても、おおむね初期投資した部分は、もうそれはそれとしてという計算方式になると思うんだ。採算性というよりも、ある程度、投資した部分は、これからの部分ということにはカウントしないかたちでなると思うんだ。試験養殖も含めて。

それなので、ある程度設備だとか施設には、ある程度、当初からやっつけていかないと難しい部分が出てくるので、当然、水槽がいっぱいあるから、海水どういうふうを導入するかという部分も、設備費でまた新たにかかってくる部分もあるのと、もう一つは、今二人だけでやっているんで、場長さんだった人ともう一人の方と。その辺の人員の部分も、試験やっているうちに、このくらいの人員がいるという部分でやっていって、効率性が良くなれば、減らせばいいわけだから、だから、ただそれで人員の部分も経費がかかるからと言って、失敗したらどうしようもないから、ある程度、人員の部分も配慮していかないと、3人、4人って必要で、それである程度慣れてきたり、そういう人件費の削減できるところはこれくらいで、実際は本格営業のときには二人でいいとか三人でいいという部分も配慮していかないとないの、その辺も今の段階からある程度、確保するものは確保するもので出してもらわないと、逆に後付けでやってしまうと難しい部分が出てくるので、その辺も注意を払っていただきたいと思うんですけれども、どういうふうに関心、考えていますか。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（安藤辰行君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員ご指摘のとおり、これまで模索しながら手探り状態で始めて、3年間やってきました。そろそろ一旦、整理をさせていただいて、次のステップということで、本年度から。それで今回ご報告したとおり熊石で3年目の成果。実を言いますと私もここに来てつくづく感じたのは、生き物を相手にして一定のサイクルで養殖をやると。それで1年毎なんですよ、水揚げの成果が出るのが。その1年経ってその結果を見て、また改めて改善していくということで、自分が想定しているより、地道な、時間がかかるということを痛感しています。ただ、3年やってきたという実績がございますので、それをベースに、今回新たに種苗生産ということがありますので、その部分を加味して夏のロードマップ的なものをお示しする時に、人件費等を含めてお示しできたらと。ご審議いただけたらと考えています。

○議長（千葉 隆君） もう一点。

○委員長（安藤辰行君） 議長。

○議長（千葉 隆君） 上八雲のほうも購入で、今年度予算なんですけど、契約がいつで、そっちのほうはどういう進捗状況というか、予定なのかも含めて、そっちのほうも見たいけれども、まだ八雲町の財産ではないから見られない部分もあるので、どの時期に見れるのかなという部分で。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（安藤辰行君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 上八雲の施設については、実は私もまだ拝見させていただいておりません。まだ民間企業様のほうで使用されていると。それで私はちょっと聞いている話では、年内を目途に引き渡すようなことを想定しているということなものですから、まだそこに、どうかたちで活用していくかということも含めて、まだ現場も見られていない状況ですから、申し訳ございませんが、また別な機会に。

○議長（千葉 隆君） 年度内、年内ということ。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 年内と伺っております。

○委員長（安藤辰行君） ほかに。

○委員（倉地清子君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 倉地さん。

○委員（倉地清子君） まずは初めまして、倉地といいます。前回欠席したので、よろしくお願ひいたします。私、凄く素人なんですけれども、簡単な質問で。搬入された稚魚って無事ですか。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（安藤辰行君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 5月26日、私も当然、夜だったのですが立ち合いまして、今、順調に育っております。先ほど言いましたように道南支場の市場長だった専門家がしっかりと見ていただいているので、私も時々見に行くようにしていますが、これから成育状況を見ながら、また池を分けたりなどして、元気に育って熊石漁港の生簀に入れていきたいと思っております。先ほどご意見いただきましたとおり、どこかの段階で総務常任委員会の皆様方にも見ていただければと考えております。以上でございます。

○委員長（安藤辰行君） ほかに。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 三澤さん。

○委員（三澤公雄君） 僕も小さいことだけど、その施設の携わった人が来るということは聞いてたし、予定どおり来られて。でも考えてみたら、そこで仕事している人達も、淡水から海水に馴らすのは自然に任せてたんだもんね。川に稚魚を離してるから。そこの経験は技術的にはないんだもんね。そこは僕も今の議論を聞くまで思いつかなかった。だから海水に馴らすということが、いかに大きなチャレンジかというのは。

○産業課長（吉田一久君） 委員長、産業課長。

○委員長（安藤辰行君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） これまでも海水馴致の作業については、過去3回含めて、今の青森の業者さんが、これらを搬入する際にご同行いただいて、そちらの方々の指示によって12時間かけて海水に馴らすというような作業を行ってきたんですね。これまで数が少なかったので、青森から持ってくる際には2t半くらいの水槽に魚を入れて、その水槽の中に海水を入れて、徐々に徐々に塩分濃度を高めるという馴らし方をするんですけども、まずは数が少なかったので、水槽の中での馴致ということだったんですけども、これからについては5千や1万の相当な数になるということで、これを水槽での馴致ということであれば相当な日数と労力がかかるので、これはいかに、どうやって軽減させるかということで、これは今、青森のほうでも行ってるんですけども、シートをあらかじめ生簀に張って、そこに真水を入れておいて、そこに魚を入れてポンプで徐々に海水を注いで馴致するという方法を取られているようなので、それについて、今回できればチャレンジしてみたいと考えているところです。

○委員長（安藤辰行君） ほかに。ありませんか。ないようですので、よろしいですか。これで終わりたいと思います。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（安藤辰行君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 引き続きまして私のほうから（3）北海道二海サーモンの報道等についてということでご報告させていただきます。資料2枚ものになっておりますが、まず1枚目をご覧くださいと思います。

先ほど来、収支のお話、ご意見を賜りましたが、北海道二海サーモンの認知度向上、販路拡大及び付加価値向上に向けて、メディア等への働きかけや飲食フェア等の実施のほか、SNS等も活用し、北海道二海サーモンの露出度を高めているところでございます。

このメディアの露出は今後の付加価値向上というか、価格的なものとして収支を考慮しながら、キロ当たりの値段を高めていく。販路も拡大していかなければならないということから、ちょっと戦略的に取り組んでいくということで考えております。

皆様、既にご承知ですが、簡単にご報告させていただきます。報道についてはテレビ、新聞等を中心に令和4年5月12日にNHK北海道で、今回の水揚げから始まりまして、そういった中で、北海道の中で、道内ではトラウトサーモンの海面養殖事業化に向けた取り組みが初めて取り組みを行ったということもありまして、HTBさん、UHBさん、それから北海道庁の広報特別番組なんですけど、STVで5月28日に、「知るほど!なるほど!北海道」で、官民、企業等と連携した取り組みということで八雲町を特集していただいております。

右側に付いてるのがSTVの道庁の広報特別番組で、このあと2年間使用していいということになっていますので、PRに活用していきたいと考えております。

新聞についても二海サーモンの熊石漁港の水揚げ、二海サーモンの販売、稚魚搬入、今、現在実施している二海サーモンのフェアについて、5月13日から5月末まで、一般紙、業界紙含めて掲載していただいております。

今回の委員会報告資料の提出後もメディアの報道が続いておりまして、ウェブメディアや新聞、テレビということで、昨日もHTBで北海道二海サーモンフェアのニュースを流していただきましたし、一昨日はUHBで二海サーモンの特集というかたちで流させていただきました。これは認知度・知名度の向上もありますが、実を言うとその後の販路拡大、それから魚価の価格向上ということも視野に入れながら取り組んでおります。

活動のところですが、二枚目にチラシというかフライヤーがついていますが、八雲町北海道二海サーモンフェアということで、ホテルポールスター札幌のレストランにおいて、6月6日、ついこないだですが、6月30日木曜日までフェアを開催して、認知度・知名度向上と共に、いくら名前を売っても評価を得ないと、しっかりとした評価を受けないといけないということで、一般の消費者の皆様、お客さんに食べていただいて、その評価を受けて、今後の参考にさせていただきたいと思っております。

また、これが終わったあとに決まったものですが、また教育委員会とも連携いたしまして、4月上旬に、八雲町内の小中学校の給食で二海サーモンを使用した料理を提供することとしております。そのほか、今回の二海サーモン、水揚げしたあとになりますますが、町内において二海サーモンの規格外品を活用して加工品を作製するなどの動きも芽生えてきており、今後に期待したいと考えているところでございます。報告は以上でございます。

○委員長（安藤辰行君） ありがとうございます。何か質問はありませんか。

○委員（関口正博君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 関口君。

○委員（関口正博君） 昨日、テレビ見ました。松田さんも嘸まずに。それで僕も今朝、実は地元の加工屋さんに出向いて、この二海サーモンの状況を聞いてきました。予想以上に問い合わせがあった。それで今の状態において、先ほど755円、浜値。この評価もいろんな情勢があるにせよ、非常に高いものであるだろうと。と同時に期待感を感じられるということを書いていました。そういうことを考えたらサーモン推進室を作った意味は、もはやそういう部分で出てきてるのかなと、僕は感じました。

ただ、やはり安定供給というものが、水産業界って本当にそうなんですよね、いくらいいもの作っても、量がなかったら非常に難しい。これから戦略立てていかないとならないんでしょうけれども、一つだけ、北海道ブランド、これは大きな武器だろうと私も最初から思っています。あと、もう一つは一番最初に北海道で手を上げた町ですが、そこは十分にブランド価値を上げるために、今まで以上に取り組んでいただきたいのと、食味に関して、青森の稚魚を使って、それで青森の技術指導を受けて、それで商品としては食味成分は青森で育てたもの、それと熊石の海で育てたものの違いはどうなんでしょうか。これ成分的な違いっていうものを個性として出せるのかどうか。それが意味があるのかわからないんですけども、これからプロモーションしていくにあたって、北海道のサーモンということだけで売り出

すのか。それともうま味そのものも、ほかと差別化できるんだということでプロモーションしていくのか。その辺の考えはあるんでしょうか。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（安藤辰行君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） ありがとうございます。

今、食味という話がありました。ご承知のとおり、全国的にはご当地サーモン戦争みたいな、戦国時代みたいなかたちになっています。それでいろんなご当地サーモンが出てきますが、その味、食味、あるいは成分というものを全部比較したものは出ていません。ただ、私どもも、果たしてどれくらいの差異が出るのかは興味がある。あるいはそれがもしかしたら、今後PRしていくときの一つの武器になるのかなと考えておりました。

昨年度は単純に成分、単純な成分分析ということで、脂質がどれくらいあるとか、そういったものは調べていますが、比較したものがない。おそらくノルウェー、チリ産のトラウトサーモン、それから二海サーモン、それ以外。ここだけでいっぱいあるので、今お話がありました、青森のサーモンが良いのかも含めて、どこかの段階で比較分析みたいなものができて、その数字がどれくらい差異が生じるのかは関心があるところで、取り組みについて検討を現在しているところでございます。以上でございます。

○委員（関口正博君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 関口君。

○委員（関口正博君） 北海道産で、しかも美味しい。これは最高峰の価値だろうというふうに思っております。当然いろいろな、ベースが同じで餌も同じで、海が違うだけということでそんなに変わってこない、日本海ですから、同じ可能性がありますから、当然、熊石には研究施設があるわけで、ウニに関しても北大の方たちが餌を吟味して事業を進んでいるというところもあります。北大の研究施設にもサーモンを入れています。なんとか、そういう連携といいますか、そういう部分でも、時間のかかる話かもしれませんが、何か味の個性というものも出せる手段があるとすれば、そちらのほうも是非検討していただきたいし、唯一無二の二海サーモンを作っていただきたいのは個人的な、議会としてはいろいろ言わないとないこともたくさんあるけれども、個人的にはそう思っていますので、よろしく願いいたします。

○委員長（安藤辰行君） ほかに。

○委員（大久保健一君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 大久保さん。

○委員（大久保健一君） 町長に言わせたら、いろんな近隣町村で作ってるのも、あそこも二海サーモンだ、ここも二海サーモンだと言ってるんだけど、そういう具体的な話って、今もう報道見れば、近隣であちこちでサーモンの養殖試験を始めているみたいだし、今回の稚魚養殖の数からいったら、やっぱりそっちに出していくんだろうし、それは近隣町村の話はもう進めているんですか、実際に。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 委員長、サーモン推進室長。

○委員長（安藤辰行君） サーモン推進室長。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 昨年8月に南北海道サーモン養殖事業推進協議会という、情報交換的な組織というものを立ち上げ、私まだ、すべて回り切れてないんですが、一

部回り始めていて、現在の取り組み状況、それから、これからどんなことを考えているのかはヒアリング等もさせていただいているところですが、二海サーモンというものを、これから取り組みを始めるほかの町で、全て使っていただければ、広域二海サーモンというブランドで売り出すことが可能で、ブランド力も高まる可能性はありますが、やはりそれぞれの町村のお考えもあると思うので、私のほうとしては、できれば広域的なブランドでということも考えていますが、それぞれの町村の取り組みなども踏まえながら、今後、協議を進めていきたいと考えているところでございます。

○委員（大久保健一君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 大久保さん。

○委員（大久保健一君） そしたら、まだ具体的な話は何もしていないということでもいいんですね。

○委員長（安藤辰行君） ほかに。ありませんか。

ないようですので、それでは資料については明日、提出してもらえますでしょうか。先ほど産業課長しゃべってた。

○産業課長（吉田一久君） とりあえず、夏までのロードマップ的なものはまとまらないと思いますが、たとえば目標とするところの販売価格や経費がいくらだとかというような部分の整理だけであれば。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 今回ご報告した中で、単純に3年目にかかったコストと、今回のどれだけ売れたという部分だけお出しさせていただいて、目標等については、ロードマップで明らかにさせていただきたいと思いますので、そういうことにさせていただいてもよろしいですか。

○委員長（安藤辰行君） それでよろしいと思います。よろしく願いいたします。

なければこれで終わりたいと思いますが、よろしいですか。

（「はい」という声あり）

○委員長（安藤辰行君） なければこれで終わります。

○サーモン推進室長（田村敏哉君） 議長、すみません。最後に。

ご報告が漏れました。口頭で申し訳ありません。今週、金曜日6月10日にNHK函館放送局のほうで「ぐるっと道南自慢のグルメウイーク」ということで、各地域月曜日から金曜日まで回って、夕方の6時40分から7時の間に生中継で放送します。その中で6月10日金曜日の6時40分から、八雲町が紹介されることに。一週間の中の最後として八雲町。食材については言えないことになっていきますので、ご察しいただけたら。

【サーモン推進室・産業課職員退室】

【農林課職員入室】

○委員長（安藤辰行君） それでは、次に株式会社青年舎大関牧場の稼働状況について、よろしく願いいたします。

○農林課長（石坂浩太郎君） 委員長、農林課長。

○委員長（安藤辰行君） 農林課長。

○農林課長（石坂浩太郎君） それでは、株式会社青年舎大関牧場の稼働状況について、ご説明いたします。はじめに配付資料に誤りがございまして、資料の設立年月日の括弧書きで搾乳開始のところなのですが、2022年4月とございますが、こちらの2021年4月の誤りでございますので、大変、申し訳ありません。修正のほう、よろしく願いいたします。

それでは、内容について農業振興係長よりご説明申し上げます。

○農業振興係長（高嶋一登君） 委員長、農業振興係長。

○委員長（安藤辰行君） 振興係長。

○農業振興係長（高嶋一登君） それでは、株式会社青年舎大関牧場の稼働状況について、ご説明いたします。

お手元の資料をご覧ください。はじめに、6月1日現在の経営概要についてご説明いたします。住所、設立年月日については記載のとおりでございます。

役員につきましては、記載の3名で、5月31日の青年舎定時株主総会にて下里晃氏が取締役牧場長に就任しております。なお、3月31日付けで宮谷裕一氏が取締役を辞任し、従業員として引き続き勤務しております。

従業員につきましては、現在、役員3名、正社員17名、研修生1名、派遣2名、パート1名の計24名で運営しております。なお、派遣職員の2名につきましては、ミャンマー出身の20代の女性であります。

主要設備につきましては、フリーストール牛舎2棟のほか、記載のとおりとなっております。飼養頭数は、経産牛481頭、うち搾乳牛403頭、育成牛255頭の計736頭で、搾乳ロボット8台を稼働させ搾乳しているほか、乳頭の形状等によるロボット不適合牛23頭は、シングルパーラーにて従業員が搾乳しております。なお、毎月、音更市場から初産牛を購入しており、年内には予定していた経産牛590頭に到達できると考えております。また、計画よりも順調に乳牛の増頭が進んでおり、予定していた市場購入金額よりも安価で導入できている状況となっております。

生乳生産につきましては、2021年度は、2,748tと計画乳量2,266tに対し、121%増と計画を上回ることができました。また、乳検成績につきましては、1頭あたり乳量は35.9kg/日と、町内平均29.4kg/日、全道平均32.8kg/日を上回る成績で、順調に推移しており、今期は、2産、3産の経産牛が増加していきますので、30kg台後半が期待される場所があります。なお、乳質や牛の健康管理面での指標となる体細胞数は63,000/mlと低く、問題なく推移しております。分娩間隔は13.0ヶ月（390日）であり、基準の指標であります400日を下回っております。

経営耕地面積は284.7ha、うち自己所有地34.8ha、借地249.9haとなっております。乳量・乳質向上のカギとなる草地の植生改善など課題もありますので、普及センターなど関係機関と協議しながら、草地改良等進めていきたいと考えております。

生産拡充計画としまして、バイオガスプラント新設工事を5月から行っております。工期は令和5年3月18日までとなっております。今後、国へのFIT申請等、事務手続きを行う予定となっております。また、接続開始時期は前後する可能性もありますが、予定では2024年度からの売電開始となる見込みであります。

次に、八雲町育成牧場の受託頭数について、ご報告いたします。令和3年度より、株式会社青年舎が八雲町育成牧場の指定管理者として、八雲町から指定を受けて管理しております。

す。令和4年度は、町内乳用牛127頭、町内肉用牛15頭、町外肉用牛11頭、北里八雲牛142頭の計295頭を受託しており、前年度は210頭でありましたので、前年度と比較し85頭の増となっております。

最後に、令和3年度の決算に関する報告につきましては、8月の総務経済常任委員会において、ご報告する予定でありますので、よろしく願いいたします。

以上、簡単ではありますが、株式会社青年舎株式大関牧場の稼働状況についてのご説明とさせていただきます。よろしく願いいたします。

○委員長（安藤辰行君） ありがとうございます。質問はございませんか。

○委員（大久保建一君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 大久保さん。

○委員（大久保建一君） 営業というか状況が好調なのはとってもいいことだと思いますが、最初の大義名分は研修牧場ですよね。就農する人たちを育てて八雲町に営農してもらおうというのが、そもそものあれですよね。今現在で研修生が一人ということで、コロナの関係もあるのかもしれませんが、今の募集だとか、これから研修生が入ってくる予定だとか、そっちにどのようなアプローチをしているのかを教えてください。

○農林課長（石坂浩太郎君） 委員長、農林課長。

○委員長（安藤辰行君） 農林課長。

○農林課長（石坂浩太郎君） 研修牧場としての機能ということですが、開設当時は、今現在1名ですが、開設当時3名の研修生がおりまして、それぞれ勤務していただいていたんですけれども、自己都合で2名の方が退職しておりまして、今年度、新たに2名の方の募集をしている状況でございまして、現場としても搾乳開始が去年の4月ということで、研修牧場という看板を背負って始めましたが、まずは牧場の運営の部分に力を注いだ部分もありますし、コロナのこともありまして、研修機能という部分でいきますと、現在のところ1名で、今年度についても2名採用する予定となっております。

○委員（大久保建一君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 大久保さん。

○委員（大久保建一君） やっぱり、それが主目的でかかってきて、議会のほうも、そういうつもりで開設したと思うので、今、コロナもあけてきた、良い方向に向いてきている状況なので、やっぱり本来の目的を達成するために、あらゆるメディアを使って、できる限りその努力をしてほしいと思うので、その辺の成果が出る作業をお願いしたいんですけれども、その辺も次回、報告するときにできたら、お知らせいただければと思います。

○委員長（安藤辰行君） ほかに。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 三澤さん。

○委員（三澤公雄君） 生産乳量が目標の121%という報告を聞いて、このあと予定どおり590頭まで頭数を増やすってお話を聞きましたが、今、業界、はっきり生産調整、個人枠は貼付けまでいきませんが、新函館農協として、この青年舎が目標頭数まで行くところの乳量は絞ってもいいという状況になっているのでしょうか。

○農業振興係長（高嶋一登君） 委員長、農業振興係長。

○委員長（安藤辰行君） 振興係長。

○農業振興係長（高嶋一登君） 令和4年度の生乳生産の計画については、新函館農協の計画乳量の中には、全て入っているというふうに伺っておりますので、令和4年度については問題なく生産できるかなと思っておりますが、令和5年、6年度についてはまだ酪農情勢がはっきり決まっていない部分もありますので、それらの状況を注視しながら、今後、計画を進めたいと考えております。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 三澤さん。

○委員（三澤公雄君） もちろん令和4年度の目標乳量の中には、増頭計画も含めての乳量が入ってるんですね。

○委員長（安藤辰行君） ほかに。

○委員（倉地清子君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 倉地さん。

○委員（倉地清子君） この青年舎の、大関牧場を購入するまでに、その場所を、経過を詳しく教えていただけたら。いつどのように。大関小学校。

○議長（千葉 隆君） 大関小学校。

○農林課長補佐（宮下洋平君） 委員長、農林課長補佐。

○委員長（安藤辰行君） 農林課長補佐。

○農林課長補佐（宮下洋平君） 大関小学校の購入の経過については、まず大関小学校として廃校になったと。その後、日本大学がそこを購入して、町から購入して、研修の施設として稼働している経過があります。その後、学校の方針が変わった時期が、ちょうど青年舎の稼働時期、設立時期というところもあるんですけれども、日大のほうから大関小学校の校舎を手放したいというような話があった時に、ちょうど青年舎も研修牧場の機能として、研修生もそうですが、短期でそういう農業研修、そういったものを行いたいというような計画もありましたので、たとえば、企業の研修や学校の研修とか、そういったところの研修施設というものとして活用できないかというところがありましたので、そういうような目的で青年舎が大関小学校を購入したというのがまず経緯であります。

それで今現在、株式会社青年舎の所有ですが、管理の運営は株式会社木蓮が運営しております、その木蓮さんが、たとえばワーケーション、働きながらそういった仕事をするとか、キャンプ施設のような、そのセンターハウスのような役割で使っているというふうになっておりますので、コロナの影響もありますが、当初はそういった企業研修とか学校研修とか、そういった多くの人数が集まる、そこに集まっていたら研修牧場で短期、一泊二日や二泊三日で研修してもらおうということで、その施設を購入した経緯はありますが、今現在こういう状況ですので、まだそういった実績等はない状況です。以上です。

○委員（倉地清子君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 倉地さん。

○委員（倉地清子君） 研修施設として活用させてもらえないかという、打診してきたのはどなたなんですか。

○委員（三澤公雄君） まだ募集してない。

○委員（倉地清子君） すみません。間違えました。

○委員長（安藤辰行君） ほかに。

○議長（千葉 隆君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 議長。

○議長（千葉 隆君） 大関牧場ではなくて、日大そのものの建物、あっちのほうも青年舎で購入したんですか。

○農林課長補佐（宮下洋平君） 委員長、農林課長補佐。

○委員長（安藤辰行君） 農林課長補佐。

○農林課長補佐（宮下洋平君） ちょっとすみません。詳しい経過ははっきり申し上げられませんが、大関小学校を購入するとき、おそらくそちらの旧日大が持っていた研修施設も一括して購入というようなことだったと思います。

そういうことで購入してると思うので、これからの活用方法についてはそちらについてはまだ特段決定しているものはないと思うんですけども、その建物だけではなくて、隣に倉庫やそういったものもありますので、そういったところを上手く活用しながら有効に活用していただくと、青年舎としては考えています。

○議長（千葉 隆君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 議長。

○議長（千葉 隆君） 日大さんはずっと奥に山林とか持ってるんですけども、そちらのほうまだ所有してるということでもいいんですか。

○農林課長補佐（宮下洋平君） 委員長、農林課長補佐。

○委員長（安藤辰行君） 農林課長補佐。

○農林課長補佐（宮下洋平君） 日大は研修施設として大関小学校研修施設は手放しましたが、ただ、大関の山林は所有しています。また学生さんも夏に向けて研修に来るということで伺っておりますし、あと、大関小学校の横に教員住宅があるんですが、そちらは日大の所有になっていますので、少人数で、そういった森林山林の管理、そういったものには日大さんも、そちらのほうを活用しているというようなことです。すべて大関から手放したというような状況ではありません。

○委員長（安藤辰行君） よろしいですか。

○議長（千葉 隆君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 議長。

○議長（千葉 隆君） 研修牧場っていう部分での、青年舎のという部分は、一つの部分だと思うんですけども、もう一つはやっぱり離農するとか経営が段々、なかなか次の代にいくのも難しいという状況もあって購入したという部分があるんですけども、そういう中では当初4軒、5軒という人達が取締役になって経営するんだと言ってただけでも、実際、搾乳する段階になったら、一人しか残っていないと。要するに漁師で言えば、自分で経営してたんだけど、雇われ漁師になってしまったという感じのスタートなんだよね。

だから、なんとなく今まで自分たちで経営してたんだけど、雇われ労働者になったみたいな感じになってるから、そういうものは本当にそういう人達のためになっているのかなという部分が、ちょっと見えづらいとかわかりづらくなって。ただ、借地で貸してるから、それだったらどこでも●●という状況があるし、その辺の、当初の成果とか、目的とか、それが少し半減している状況もあるので。

それでもう一つは、もう一つの研修牧場の部分がなかなか成果が出ていないという部分があるから、経営そのものはきちんとやってるんだろけれども、目的というものが評価されていない部分があるので少し研修牧場も新規就農になったときに、メガ牧場で研修すると、新規就農者がいっぺんに600とか700頭経営できる農家になるわけじゃないでしょうという部分からすると、最初から小規模の牧場で研修したほうがいいんじゃないかっていう人もいるから、その辺の批判は批判として聞くけれども、そこを違うんだよという部分を見出してもらわないと、なかなか我々も地域に行ったときに説明できないから、その辺うまく特色というか、目的にあったような感じでこういうふうにやっていますって出してもらわないと辛いところがあるので。課も大変だと思う。その辺上手く導いてほしいと思うんだけど。

結構言われるんだわ、俺たちも。辛い部分があるんだわ。だからなんとか研修者来て、こういうふうにありますとか、経営の部分もちよっと経営から、年齢的な部分で役員まではやっていないけれどもどうだとか、そういう部分をやってもらわないと、当初言ってることと違うということばかり言われるから、我々もしょーんと来ている部分もあるので、その辺当初目的を履行できるかたちとか、イメージとか、PRとか、そういうものを発信してほしいなと。努力目標なので答えはいいんですけども、お願いいたします。

○委員長（安藤辰行君） ほかに。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 三澤さん。

○委員（三澤公雄君） 今、議長がおっしゃるのはもっともな部分だと思うんですけども、労働力は足りてるのかもしれませんが、酪農に夢を持っている方を、今入っている研修生は地域おこし協力隊は給料が出ている人ですからね。だから青年舎、予定どおり絞れば経営的に問題ないはずですので、夢を持っている方、たとえば学林ファームさんや竹村さんとかスプライズさんとかに入っている研修生が、青年舎のことを知らないから入ったのかもしれませんが、あぁいったかたちで門をたたく人達が青年舎の牧場を叩けるようなPRをもっと積極的にして、働く環境は整えてもらわないと、本当に委員の皆様おっしゃる心配事にちゃんと答えてもらえる環境があるんじゃないかと、もっとやってもらいたいのと。

あと出資している農協。夢を持っている方がしっかりと経営感覚を身に付ける。牛に慣れるとか酪農の初歩の仕事を青年舎の牧場でしっかりと学んで、自分の夢がしっかりと。放牧酪農を目指したいとか、もう少し集約的な酪農を目指したいとか、そうしたときに組合員の牧場に入ったときに、組合員の親方が一から教えなくても、7か8から教えたらいいというそういう負担の軽減ができると思うので僕はメリットをもっと発揮できると思うんです。一方で農協がもっと経営感覚を身に付ける、経営の技術を身に付けるのに、それが一番見えてきていないので、農協さんにもうちょっと、その辺の目的を明確に示してやるってことも大事なのかなって。役場が経営まで教えるのは難しいと思いますので、それはどんなものでしょうか。

○農林課長補佐（宮下洋平君） 委員長、農林課長補佐。

○委員長（安藤辰行君） 農林課長補佐。

○農林課長補佐（宮下洋平君） 今、千葉議長と三澤委員がおっしゃったとおり、当初の研修牧場の目的は、もちろん研修の場ということで、生乳生産が第一の目的ということで、メ

が牧場、500頭規模の牧場で研修しても、個別の農家さんを引継ぐとなったときに、繋ぎの農家、繋ぎの牛舎を引き継げるかといったところも、計画当初からそういう課題があります。先ほど三澤議員がおっしゃったとおり、まず青年舎の大関牧場では、農業、酪農の基礎的な部分、そういったものを座学を含めて勉強してもらおうと。そこに関係機関、役場の普及センター、そういったところが基礎的な知識、経営の感覚、そういったものを養っていただくのが、主な大関牧場の担っているところだと思っています。

それで、今、関係機関との中で、農協の話もありましたが、三澤委員がおっしゃるとおり、私たち農業経営の詳しいところは素人でありますので、それぞれ得意分野のところ、責任持って研修生に勉強させてもらうというような役割分担が大事だと思っていますし。ただ、研修何か月かして駄目でしたとはならないように、それぞれの各関係機関が連携しながら育てていくというような仕組みを構築していきたいというふうに思っておりますので、先ほど課長からもありましたが、まずは母体となる農業経営のほうを、しっかりさせたうえで、そういったところも検討中ですので、もうしばらくお待ちいただければなと思います。よろしく願いいたします。

○委員長（安藤辰行君） ほかに。ありませんか。

ないようですので、これで終わりたいと思います。ありがとうございました。

【農林課職員退室】

【政策推進課職員入室】

○委員長（安藤辰行君） それでは、ふるさと応援寄附金の実績について、政策推進課からご報告よろしく願いいたします。

○政策推進課長（川口拓也君） 委員長、政策推進課長。

○委員長（安藤辰行君） 推進課長。

○政策推進課長（川口拓也君） お手元の資料に沿いまして、政策推進課より今回、報告事項がございますので、資料に沿いまして順番に担当から説明させていただきます。

○企画係主任（長谷川佳洋君） 委員長、企画係主任。

○委員長（安藤辰行君） 企画係主任。

○企画係主任（長谷川佳洋君） それでは、1令和3年度ふるさと応援寄附金の実績について説明させていただきます。資料1につきましては、一般のふるさと応援寄附金の実績となり、資料2は企業版ふるさと納税の実績となります。

資料1をご覧ください。（1）寄附件数及び金額についてです。令和3年度の寄附件数は14万4,359件で、前年度と比較して41.2%の増加となっております。また、寄附金額は25億2,147万7千円で、前年度と比較して30.2%の増加となっております。

続いて、（2）月別寄附状況につきましては、例年ですと9月から寄附が増えたあと、12月にピークを迎え、1月から少なくなる傾向にあります。令和2年度は、寄附が集中する10月から12月で主力返礼品の一部で原価高騰による寄附金額の値上げの影響が大きく、苦戦しましたが、令和3年度は返礼品の原価高騰など大きな問題もなく、一年を通して寄附を受け付ける体制をとることができました。12月に関しまして、例年ですと11月の3倍ほど寄附が集まる月となっておりますが、令和3年度につきましては、1.4倍という寄附額になっ

ています。寄附件数は、さとふるのトップページに表示されるランキングの影響が大変大きく、主力返礼品の順位が下がったことによるものと受けとめております。

資料1の裏面に移りまして、(3)用途の指定状況についてです。

当町のふるさと納税は、寄附者が寄附金の用途を指定できることとしておりまして、記載のとおり11種類の用途を定めております。このうち、1番から5番は、第2期八雲町総合計画の第1章から第5章に、それぞれ対応する用途としております。令和3年度の用途の指定状況としましては、全体の83.6%、21億892万2千円が「その他目的の達成のため町長が必要と認める事業」を指定しており、例年と同様の傾向となっております。

資料1の説明は以上とさせていただきます。

○政策調整係長(右門真治君) 委員長、政策調整係長。

○委員長(安藤辰行君) 政策調整係長。

○政策調整係長(右門真治君) 続きまして、企業版ふるさと納税の令和3年度の実績についてご報告させていただきます。

資料2をご覧ください。はじめに(1)令和3年度寄附件数及び金額に実績ですが27件4,350万円となり、寄附金活用事業の内訳については(2)のとおり、令和3年度は研修牧場整備事業に1,180万円、サーモン試験養殖事業に1,620万円、ふるさと応援寄附金奨励事業に1,550万円となり、寄附企業からの申し出がない限り、当町側で振り分けしております。

続きまして、寄附の詳細についてですが、金額別内訳については(3)のとおりとなっており、非公表で企業の申し出もありましたので、実際の寄附金額は企業名は伏せさせていただきますが、当町においては約半数の企業が寄附対象となる下限の10万円となっており、最高金額で、1社より1千万円を超える寄附をいただきました。また、100万円以上の寄附も数件あり、昨年度も含めた合計件数の78件については、全国においても上位に入るものと推測しています。継続してご寄附いただいている企業は(4)のとおり13件、300万円、令和4年度もご支援いただけるよう勧めていきます。

所在地別の内訳については、(5)のとおりとなっており、道内企業からの給付が多い状況で、寄附の大部分は町長のトップセールスによる実績と、これまでの町の関りある企業からと分析しております。道外7件のうち6件については、当該業務を委託しているJTBを通しての寄附となっており、今年度も営業活動に尽力いただけるように依頼しております。

以上、企業版ふるさと納税の説明とさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

○委員長(安藤辰行君) ありがとうございます。これについて質問はございませんか。

○委員(関口正博君) はい。

○委員長(安藤辰行君) 関口さん。

○委員(関口正博君) 本当にありがたいお話だろうと思っておりますが、一つだけお伺いさせていただきます。資料にはないんですけども、どうしても危惧するところは、今、八雲の主力商品がロシア産という部分で、戦争が始まって以降、この4月5月、どのような数の推移なのか、そこら辺というものに、寄附いただいている国民の皆様はどのような反応を示しているのかの傾向はどうなんでしょうか。今年の4月5月のデータは出ていないのでしょうか。

○企画係長(多田玲央奈君) 委員長、企画係長。

○委員長（安藤辰行君） 企画係長。

○企画係長（多田玲央奈君） 今年の4月がですね、寄附金額で4,276万円、それから5月が5,004万5,000円。去年より若干減少しています。ロシア産のものについては、ふるさと納税の寄附受付画面で、原材料がロシア産と記載していますが、この4月5月の状況を見る限りでは、寄附する側からの距離感や、そういったものはあまりないのかなというふうに感じております。

○委員（関口正博君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 関口さん。

○委員（関口正博君） ロシア産は八雲の主力商品だけではなく、いろいろ散見されるので、思ったほど減っていないことに安心しております。これからもこの金額に注視していただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

○委員長（安藤辰行君） ほかに。

○委員（大久保健一君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 大久保さん。

○委員（大久保健一君） ざっくりでもいいので、一般のほうの、ふるさと応援寄附金の返礼品の件数でも金額でもいいから、何が何%かわかりますか。

○企画係長（多田玲央奈君） 委員長、企画係長。

○委員長（安藤辰行君） 企画係長。

○企画係長（多田玲央奈君） 具体的な商品名、返礼品名は差し控えさせていただきたいんですけども、7割くらいは海産物という状況になっております。あとは、牛肉や豚肉、あとはハムだとか肉の加工品ですね。そういった肉系が次に来るという状況です。

○委員（大久保健一君） 7割海産物で3割がその他と。

○委員長（安藤辰行君） ほかに。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 三澤さん。

○委員（三澤公雄君） 今の議論を聞いていて、3割のほうが大事になってくるのかなと思うんですけども、地元企業、八雲町の返礼品を用意しているというか、八雲町の知名度を上げるのに協力している企業が、このことによってどうやってお客さんを捉まえているのかということも、これは商工観光労政なのか。僕はふるさと納税の議論の中で、どうやって地元企業がこれを活かしていくか。最初ふるさと納税の知名度がないころに、どうやって八雲の協力してくれる企業を広げるかって議論の中で、リピーターをどう捉まえるかとかさ、そういうことも役場としては応援したり、ちゃんと把握するということは、八雲全体でやっていかないといけないよねってしていたので、喋られないという部分があったのかもかもしれませんが、ちゃんとそのことが、考えたとおりに、八雲のファンを増やしているのかどうか、金額も大事だけれども、僕はそっちのほうも興味ありますが、そういうのは掘んでいきますか。

○企画係長（多田玲央奈君） 委員長、企画係長。

○委員長（安藤辰行君） 企画係長。

○企画係長（多田玲央奈君） 正直言いまして、ふるさと納税の返礼品から、寄附ではなくて、一般のインターネットショッピングだとか、取り寄せだとか、ふるさと納税以外でも購

入に繋げるべきだという議論だと思いますが、あまりそこは政策推進課としては意識できていなかったのも、正直言いますとそこは弱かったのかなと思いますので、今後、商工観光労政課と連携しながら、ふるさと納税以外の購買行動にどうやって繋げていけるのかは検討していきたいと思います。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 三澤さん。

○委員（三澤公雄君） そこは各企業さんの努力だと言われたらそれまでなんだけれども、今、身近に頑張っている企業がいる中で言うのはあれだけれども、それって官民挙げて7やっていくという、頑張っていますかみたいな感じで声をかけるとか、その状況を把握する。そして引き続き町内の企業さんの商品開発なんかに、こういった努力が実っている企業もあるので、そういう刺激も商工業者さんには必要だと思うので、データの把握や現況把握は必要だと思って言ったんです。

○委員長（安藤辰行君） よろしいですか。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（安藤辰行君） ほかに。

○議長（千葉 隆君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 議長。

○議長（千葉 隆君） 海産物7割というのわかりますが、それはそれで本当に実績もあるし、これからも期待したいんですけども、日ハムも結局、肉系が多いので、うちの職場、女性職場なもんだから、結構聞けば、やっぱり日ハムでシャウエッセンがいいんだよね。買ってるんだわ。だからああいうのは八雲産でないのかどうか、なんかうまく結びつけられるかたちを作ってもらえたら、結構、日ハムからパンフレット貰って、年3回か4回、職員に安くやってるんだけど、必ず選り好みはするんだよね。ギフトのときはどうのこうのっていろいろそのときによるけれども、必ずみんなシャウエッセンは5つくらい買うんだわ。だからそういう最初から売れているものを八雲と地場の部分で結び付けることも一番いいのかなって。それで町長も常々、新庄がいいからって言うけど、それはそれでいいんだけど、物は結局PRする人よりも、この場合は物だから、シャウエッセンが売れる道筋というか工夫というか、できないのか、ちょっと日ハムさんと話して、話というわけではないけれども、できればきっとシャウエッセンなら本当にすごいんだよ。うちだけかもしれないけれども、必ずみんなシャウエッセン。年代層もほとんど食べるんだわ。だから消費も多いので、その辺今までどういう。ちょっとどうなってるんですか。

○政策推進課企画係長（多田玲央奈君） 委員長、企画係長。

○委員長（安藤辰行君） 企画係長。

○政策推進課企画係長（多田玲央奈君） 情報ありがとうございます。

日ハムが出してるシャウエッセンが総務省でいう地場産品の基準に該当するかどうかも含めて、確認しながら検討していきたいと思います。ありがとうございます。

○議長（千葉 隆君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 議長。

○議長（千葉 隆君） 要するに、該当できなかつたら、何が駄目でこう変えたら該当なるっていうか、その辺やってくれたら、ちょっと挑戦してもいいかなって品目であると思うんです。

あともう一つ、用途の指定状況だけれども、そのほかの目的の達成のために、町長が必要と認める事業とあるんだけど、なんかこれを指して、町長が好きに使ってもいいって言ったと言ったように常日頃から。これは町が予算組むから議会も通さないとないし、町のほうで、町長というより町がそれぞれ目的を決めてくださいということだもんね。

○委員長（安藤辰行君） ほかによろしいですか。

（「はい」という声あり）

○委員長（安藤辰行君） それではこれで終わりたいと思います。ありがとうございます。

○政策推進課企画係主任（齊藤 彩君） 委員長、企画係主任。

○委員長（安藤辰行君） 企画係主任。

○政策推進課企画係主任（齊藤 彩君） それでは、予約バスの実証運行について説明させていただきます。

5 ページ資料3をご覧ください。はじめに、1 本実証運行の目的は、交通弱者の足を確保し、免許返納後も生活しやすい環境をめざし、取り組むものです。

2 運行形態については、予約した人だけが乗れる「予約バス」で、予約がない場合は運行しません。また、タクシー業への影響を考慮し、ドア・トゥ・ドアとはしませんが、運行ルート上であれば、どこでも乗り降りできるようにしたいと考えております。運賃は、既存交通機関の額をベースに今後、検討していきます。

3 区間については、栄浜落部方面から八雲、黒岩から八雲、八雲市街地内の循環バスを予定しております。また、栄浜－八雲間と黒岩－八雲間については、資料中段にあります既存のバス・JRのダイヤの空白時間帯のいずれかで運行を考えております。市街地内循環バスのルートについては、今後検討していきます。

4 スケジュールについてです。実証運行の実施は令和5年2月を予定しております。理由としましては、積雪による道路環境等の課題が見えやすいことや、新型コロナウイルスのワクチン接種状況を踏まえ、利用者層として想定される高齢者の大多数が追加接種を終え、できるだけ安心して外出できる環境において実証運行を行いたいという観点から、令和5年2月を設定いたしました。

周知方法については、広報やくも、町ホームページ、LINEなどを活用したいと考えております。資料3の説明は以上となります。

○委員長（安藤辰行君） ありがとうございます。このことについて質問はございませんか。

○議長（千葉 隆君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 議長。

○議長（千葉 隆君） 予約バスそのものはそれでわかったんですけども、森町で良品計画で無人のバスを走らせるということで試験運行をするんだけど、八雲もトヨタと無人運転の話があるって前に言ってたんだけど、それと無人でシャトルバスだとなれば、この計画といつかドッキングするのか、それはそれ、これはこれというふうに行くのか、どのような感じで。森の場合は無人でやって地域間バスの運行を始めたわけだ。そういうような感覚で。だからその辺それはそれでお互いにやりながら、どうしたらいいかは今後

詰めていくということなのか、そもそもトヨタ自動車とはないとか。前はちょっと言っていたからどうなっているのかなって。

○政策推進課企画係長（多田玲央奈君） 委員長、企画係長。

○委員長（安藤辰行君） 企画係長。

○政策推進課企画係長（多田玲央奈君） トヨタとの話なんですけど、今のところ具体的なものですとか打ち合わせだとか、そういったものは今のところはない状態です。その無人で走らせることができるバスというのが、バスの車両の技術だけで済むのか、あるいはそういう道路の整備だとか、なにか道路に何か備え付けなければいけないのかというところにもよると思いますが、もし、無人で走らせることができるバスが本格運行できるようになれば、おそらくこういった実証実験で路線化しているところに、そういったバスを導入するだとか、そういう話になってくるのかなと思うのですが、今のところ具体的なものにはなっていない状況です。

○委員長（安藤辰行君） よろしいですか。

○議長（千葉 隆君） はい。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 三澤さん。

○委員（三澤公雄君） これ、すごく簡単な資料で、ちょっとわからないことが多いんだけど、吟味して質問します。

これ熊石でやった予約バスと全く同じ方法でやるから、運行する車両の説明もなければ、予約方法も。それとも前に説明したでしよってことですか。ちょっとわかりづらい資料だなと思ったんですけども。

○政策推進課企画係長（多田玲央奈君） 委員長、企画係長。

○委員長（安藤辰行君） 企画係長。

○政策推進課企画係長（多田玲央奈君） すみません。これは先ほどの説明でもですね、2月に実証実験をやるということを想定してございます。その前の段階で住民説明会や、それから実施するにあたって公共交通会議という八雲町が持っている会議なんですけれども、そこにかかけたりだとか、いろいろ段階を踏まなければならないとなっています。

○委員（三澤公雄君） 今の段階ではこの程度の枠を決めました。決めれましたということ。

○政策推進課企画係長（多田玲央奈君） そうですね。もしこれで常任委員会のみなさんから何かご意見、こういうことも検討したらというご意見もあれば伺いたいなという思いで、今日報告させていただいておりますので、すみません。わかりづらくて。お願いいたします。

○委員長（安藤辰行君） よろしいですか。

○委員（三澤公雄君） わかりました。

○委員長（安藤辰行君） ほかに。ないようですので、これで終わりたいと思います。ありがとうございました。

【政策推進課職員退室】

休憩

再開

◎ 協議事項

○委員長（安藤辰行君） それでは再開いたします。

協議事項の付託のあった請願書の審査ということで、事前に皆さんに資料は配付していますので、ご覧になっていると思いますが、それについて佐藤さんのほうから何かご意見がありましたら許しますので、どうぞ。

○委員外議員（佐藤智子君） 今すぐいいですか。

○委員長（安藤辰行君） いいですよ。

○委員外議員（佐藤智子君） このたび請願の紹介者となりました佐藤です。

請願を求めてきた団体の代表が情報公開請求をしたところ、ここに持ってきていますが、40枚くらいあるんですが、そのほとんどが回覧して見てもらいたいと思っはいますが、見えますか。

○委員（大久保健一君） そのことはいいから。

○委員外議員（佐藤智子君） 真っ黒なんです。

○委員（三澤公雄君） 多分、理解してないんじゃないの。

○委員外議員（佐藤智子君） それで総務経済常任委員会で。

○委員（三澤公雄君） 佐藤さん。多分、委員長が言ったのは、直前に配ったことになったんだけど、請願書に書かれている内容が、ちょっと僕らが受け取っている、新幹線室からもらった資料と比較したら、事実と違うとか。

○議会事務局長（三澤 聡君） 請願を出したことに対して今、出ていますので、それで補足があればということで、なければそのまま。

○委員（三澤公雄君） そっか。

○委員長（安藤辰行君） あったら許しますということ。

○議会事務局長（三澤 聡君） その請願書に対して何か補則であればと。なければこのままの請願書の内容で。

○委員外議員（佐藤智子君） 補則といいますか、ちょっと手元に8月11日の資料を用意してくるということを怠りましたので、資料に基づいてここが違うんだということを指摘はできませんけれども、この紙を見てしゃべらないといけないのね。

そういう点で、相違点も随時というか相違点も指摘していただいて、それを確認し合うとか、そういう作業が必要になってくるとは思いますが、開示請求した結果、この真っ黒なものが出てきて、それで審査会が機構本体の情報開示請求にあたっての、どういう対応したのかを聞き取りしてるんですね。その聞き取りの結果はやはり町が出してきたのと同じとか、機構が出さないでくれといった結果、町もそういう真っ黒な出し方をしているということが審査会を通じてわかったわけです。

それでもって、これだけ黒いということは、どれだけ隠したいことがあるのかということを表しているのと同じであります。それはつまり町民に対して隠しておきたいことがこんなにあるんだということをまさに表している。そういう八雲町でいいのかと。そういう八雲町を許している議会がいいのかということで、議会の良識を信じて、請願が採択されることを願っています。

○委員長（安藤辰行君） 請願書の内容について、事務局と確認したんですけれども、それで、先ほどもらった用紙が渡ったと思うんですけれども、その内容について事務局から報告をお願いしたいと思います。

○議会事務局長（三澤 聡君） 委員長、局長。

○委員長（安藤辰行君） はい。局長。

○議会事務局長（三澤 聡君） それではですね、先ほど資料をお配りしていますが、今回の提出のありました請願書、これは今回、委員会資料ということでお配りしております。それで2枚目の請願書のいわゆる原本ですね。そちらのほうの文書の中で、いろいろ書かれている中で、今回の請願の理由の中の問題としている文面について、これまで総務経済常任委員会で幾度と新幹線推進室から報告を受けておりますので、その会議録や資料をもとに中身を検証してみたものがこれでございます。これはあくまで、今回、事務局で調べた結果であるということをご了承願いたいと思います。

それでは資料のほうをご覧いただきたいと思います。まず、(1)の部分ですね、これは請願書原本の裏面の、上から5行目のところ。八雲町においてもという次の部分ですね。昨年10月に磐石トンネル内から国が定めている環境基準値を130倍超えるヒ素含有の土が掘り出されたということで記載されておりますけれども、これについては、令和3年9月10日開催の委員会の中で、最大値で1.3mgのものでありましてという説明を受けております。この最大値で1.3mgということですので、環境基準値が0.01mgでありますから、最大で130倍のものがあつたという解釈になるのではないかというふうに思います。

それから同じく裏面の12行目の8月11日開催の総務経済常任委員会においてはということで、黒岩A（盛土②）に持ち込まれた発生土は、ヒ素が130倍でありながら14倍とした資料を委員会に提出していますということで、8月11日の総務経済常任委員会に14倍とした資料を委員会に提出されていると書かれていると思いますけれども、令和3年8月11日開催の委員会を見ても、このときは黒岩C、それから鉛川の対策土受入候補地の説明をしております、この委員会の中で黒岩Aに持ち込まれた発生土の説明ないし資料を見たんですけれども、そういうことは書かれていない。見当たらないという状況でありました。見落としがあるかもしれないですけれども、昨日、確認した中ではそういう状況でした。

それから、(3)は、14行目中段当たりの、またのところですが、黒岩C処分地への持ち込み発生土は、ヒ素が140.9倍と記載されています。これは同じく令和3年8月11日開催の委員会のことであろうというふうに思いますが、この資料を見ても、黒岩地区C発生土受入地における予測という資料があるんですけれども、その中でヒ素のトンネル発生土搬入可能最大濃度として、1.409mgと記載されておりました。搬入可能最大濃度という書き方です。それからすると環境基準値が0.01mgというふうに考えますと、搬入可能最大濃度が140.9倍ということになるのではないかと。あくまでも、持ち込み発生土ではなく、搬入可能最大濃度という捉え方になるのではないかとというふうに考えられます。

それから(4)はですね、下から7行目のところに、北斗市では市議会に特別委員会が設置されてからは十数回に及ぶ会議の中で北斗市行政が説明するのではなく、鉄道・運輸機構そのものが市議に説明を行っているという書き方をしておりますが、これについては違ふとかそういうことではなくて、情報共有とか情報提供ということで記載させていただ

いております。それで調べてみると、北斗市議会では令和元年9月17日に特別委員会を設置しております。その理由は、記載のとおりでございます、八雲町が関係する内容であったということで、北斗市議会だよりを調べて、このように記載されておりました。北斗市議会では、特別委員会に参考人として鉄道・運輸機構を呼んでいるということで、市議会のほうから聞いております。

それで、参考人とはどういうものかといいますと、次のところに書いていますとおり、地方公共団体の議会の委員会は、当該地方公共団体の事務に関する調査や審査のため、利害関係者、学識経験者等を参考人として出頭を求め意見を聞くことができるというふうに自治法で規定されております。

委員会が参考人等を求めることを決定した場合は、その旨を議長に通知し、議長はその産後任に日時、場所、及び意見を聞こうとする案件、その他必要な事項を通知しなければならないと議員必携に記載されているので、そのようなことで運用されているのではないかと、いうふうに思っております。また、参考人を呼ぶにあたっては、費用弁償、旅費は議会で支払うということになっております。一応、参考人はこういうことだというふうにお含みおきをお願いいたします。

以上で、議会事務局として調べた結果と違う部分があったのかというふうに調査の結果出ましたので、一応、報告させていただきます。はっきりしたということは、これがはっきりこうだというのは新幹線推進室に確認していませんので、あくまでも議会事務局で調査した結果ということで了解していただきたいと思っております。以上でございます。

○委員長（安藤辰行君） これより質疑に入りたいと思いますが、なにかご意見はございませんか。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 三澤さん。

○委員（三澤公雄君） 町民から出てきた請願書は大切に扱いたいと思っておりますが、書かれている内容が、これまで機構から新幹線推進室、新幹線推進室から我々常任委員会に報告のあった内容と記載内容が違うということもあるので、このままでは受け取れないのかなと思っておりますが、ここで事務局が説明資料を加えたみたいに参考人の招致は常任委員会でもできるんですね。だから、常任委員会やる気がないわけではなくて調査項目にも上がっていきすし、このあと視察も含めて計画ありますから、佐藤さんがこれからも入手するであろういろんな指摘するような事項を常任委員会と連絡を密にして一緒に視察を回することも可能ですし、このあとの委員会の進め方も、こういうことを調べてほしいということは可能なので身を取ってもらいたいというか、特別委員会を作らなくても総務常任委員会で頑張れるところを理解してもらえないのかなと。今書かれている請願書の内容が事実と違うことが書かれているので、このままでは受け取れないのではないかと思います。

○委員外議員（佐藤智子君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 佐藤さん。

○委員外議員（佐藤智子君） もう既に受け取っているということと、それとこれを読んでもどこが間違えているのかがわからないというか、(2)は発生土の説明および資料が見当たらないということが書かれていますから、ちょっと違いがあるのかなと思っておりますけれども、(1)と(3)は新幹線推進室が説明した内容でもありますので、相違はないと思いま

す。(2)については、もうちょっと調べる時間というか確認する時間をいただきたいと思います。今日、拙速に特別委員会はいらないというような方向にもっていくのはちょっと遺憾でございます。

○議長（千葉 隆君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 議長。

○議長（千葉 隆君） 団体さんのほうは開示請求までしてたり、北斗市の市議会にもいろいろと問い合わせたりしてるから、少し慎重に対応したほうがいいのではないかと。それで今あくまでも事務局から提出されたものは、委員会に提出されたものと資料と照合して出たものであるから、そのほかにも請願者のほうは、黒塗りの関係で八雲町が隠しているという表現をしてただけけれども。佐藤議員さんの説明ではね。だからその中で審議会の部分を聞いたら、機構側から開示しないでくれって頼まれたから黒塗りにしたという発言があったけれども。

○委員外議員（佐藤智子君） かもしれない。

○議長（千葉 隆君） かもかい。かもしれないの。どっち。

○委員外議員（佐藤智子君） かもしれないとかって、表現の問題は置いといて、審査会から文書が出ているので、それと機構の意見書というのと八雲町が出した情報が一致しているということと言いたかった。

○議長（千葉 隆君） 一致していることと、開示を頼まれて黒塗りにしたということでは違うでしょ。そういうふうに言ったしょ。

○委員外議員（佐藤智子君） 発言に間違いがありましたが、機構は機構でそういう意見書を出していて、八雲町は八雲町の判断で情報公開条例に則って、請求者に資料を開示したということです。

○議長（千葉 隆君） 開示したんでしょ。そしたらそれはそれでいいんじゃないの。

そういうのもあるんだけれども、いずれにしても、これはあくまで今日提示された事務局のやつは、今ある資料の中から照合したと言ったけれども、実際に原課の推進室で今の請願の中身について見解を聞いてるわけではないので、一旦は新幹線推進室からその請願の内容について正しいのか正しくないのかを出してもらおうというか。出してもらって、これを基にして我々どうのこうのって言ったら議会に来ちゃうから。だから、まずは新幹線推進室で請願の内容について、どういうふう経過があるのかということをお新幹線推進室からこちらの委員会に話をしてもらおうということが、まずは検証する部分で必要だと思うんです。何に基づいて我々判断したかといったら、新幹線推進室からこういうふうなことも来ましたよと。それで、それから請願を受けた人もこういうふうにしましたよと。それを比較してこうだよと持っていないと。これは今ある我々の資料だから。そういうふうにしたほうがいいのではないかなと思うので、まずは一回は新幹線推進室からこの請願に内容について、どうなんですかっていうことを正式に聞くべきではないかなと。

だから委員会での議事録もあるだろうし、ただ、今、請願の紹介議員さんからあるように(1)であれば、最大値なのかというふうには書いてるのと、環境基準値の130倍を超えるっていうのは、やっぱり最大値とそうでないのは大きな違いがあるという部分は普通はそう思うんだけど、そうでないという方もいるわけだから。だからそういうことも、何を基準に判断したかということの元を、事務局が作成したものを元にしてやるのではなくて、新

幹線推進室からどういうふうになったかを見て議論したほうがいいのではないかなと思うんですけども、その辺、事務局に調べてもらって悪いんですけども、手続き的にどうなんだろう。そういうのもありだと思う。

○議会事務局長（三澤 聡君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 局長。

○議会事務局長（三澤 聡君） 今、発言がありましたとおり、一応、事務局として会議録と資料をもとに読み取った今回調査の結果ですので、正確性を求めるとなると、新幹線推進室に常任委員会として町側に正式に依頼するという行為が必要になりますので、すぐに調査結果を得るとしたら、そういうような手続きや方法が一番いいのかなというふうに事務局としても思っています。あくまでも、事務局の調査結果でありますので、そこは信ぴょう性というか、言われたら事務局も弱いところですので、もし可能であればそのような方法でやっていただけたらと思います。

仮に町側に委員会として請願書の見解を求めるといった行為をした場合は、会期中の今日、明日で終了しますので、今日、明日で新幹線推進室に結果を求めるのは町側に対しても準備等があると思いますので、ある程度の期間を与えた中で出してもらおうということになるかというふうに思います。そうすると、今回の付託の件については、閉会中の継続調査というふうな方向で持って行って、次の委員会をいつにするかは町側と協議した中で開催していくというような方向になるのではないかと考えられるかと思えます。

○委員長（安藤辰行君） 今、事務局からお話がありましたとおり、そのような流れになると思いますが。

○議長（千葉 隆君） 違いがないなら、単独で議論して結果を得てもいいんですけども、軽くちょっと調べただけでも違いがあるから、違いを確実に確認して判断する必要があるのかなと。あとでまたこの部分だけでやり取りになったら困るから、それで今、本来であれば今の会期中にどうですかというのを本会議で出せるんですけども、ちょっと違いが出てきたから、確実に本当に違うのか違ってないのかを確認してからということで、今回、付託については閉会中の継続調査にしてもらって、日程を定めるみたいなかたちにしていたほうがいいんじゃないのかなと。ないならいいけれども、ちょっとこれ。

○委員長（安藤辰行君） 相違があるからね。佐藤さんそれでいいですか。

○委員外議員（佐藤智子君） はい。

○議長（千葉 隆君） 佐藤さんも今すぐ結論したら駄目だみたいな話してたからね。

○委員長（安藤辰行君） ちょっと時間をかけて。継続ということで。

そしたら事務局のほうに新幹線推進室に日程組んでもらって。

○議会事務局長（成田真介君） 次回になるのか、たとえば文厚の日に合わせてやるのかもちょっと調査の日程等を考えながら進めていきたいと思えます。

○委員長（安藤辰行君） 視察は23日。

○議長（千葉 隆君） 文厚は16日だから、だから原課でどれくらい日数がかかるかによって16にするとか23日にするとか別にするのは委員長に任せます。

○委員長（安藤辰行君） 23日視察の日。

○委員外議員（佐藤智子君） 時間がない。

○議長（千葉 隆君） その辺は一任するというので。

○委員長（安藤辰行君） 日程的なことは新幹線のほうとということによろしいですか。

（「はい」という声あり）

○委員長（安藤辰行君） それではこの件についてはこれで終わりたいと思います。

○委員（三澤公雄君） 先ほどサーモンの話でさ、現地視察も考えたらどうかなど。

○委員（牧野 仁君） 熊石かい。

○委員（三澤公雄君） それもあるけども、青森、オカムラ食品さんを見るのも、行ける範囲で、視察解禁の口火を切るのにどうなのかなと思って。

（何か話す声あり）

○議長（千葉 隆君） 行くなら見てきたほうが良いと思う。

（何か話す声あり）

○委員長（安藤辰行君） 視察には行くという方向で。

◎ その他

○委員長（安藤辰行君） 次回の日程は。

○議会事務局次長（成田真介君） 次回は定例ですと8月なんですけど、その前に新幹線の件についてあるかもしれませんので、今は確定ではない。

○委員長（安藤辰行君） 後日連絡ということ。23日は決まってるの。

○議会事務局次長（成田真介君） 23日は視察決まっています。

○（大久保建一君） これは公用車じゃなくても一般車両で入れるの。遅れたりしたら。

○議会事務局次長（成田真介君） ほとんど一方通行みたいな感じの狭さですが、車自体は入れると思います。

○委員（三澤公雄君） 委員長、今回その他で肉牛の時間を作ってもらってるんですけど、もうこんな時間なので、ちょっとさらっと。

資料の5行目に誤字があるので、No. 3から4の流通量が一番早くって書いてるけれども、これは多くだと思う。流通量が一番多くなるように設定されている。何がこの資料で言いたいかといったら、ブランド作るときにA5がみんな頭の中にいろんなテレビでも言われてるけれども、A5にもピンキリがありまして、俗に言う僕のレベルで申し訳ないけれども、BMS、脂肪交雑、もう本当に最高級の入ったサシは、肉が赤くない。ピンクになっていたりするんです。一般的にBMSの7というランクが僕らの目にする高級肉のランクで、でもブランドはさらに4つくらいランクが上がるのがありますから、ごっちゃにしないでほしいということ、ほんとならカラーで示したかったんだけど、言葉としてたとえば僕もA5は作ったことはあるんです。僕ごときでもF1という黒毛とホルスタインのあいの子が八雲で走りやっったときに、うちも仕上げまでやっったけれども、A5は取りました。だけど脂肪交雑でいったら6とか7だったと思います。当時の資料を見ても。

○委員（大久保建一君） 実際に目の前にしてみないとわからない。

○委員（三澤公雄君） それと申し入れがありまして、やる気のある生産者たちが直に議員の皆さんとお話したいということで一般会議の申し込みがありましたので、可能であれば8月の定例の会議のときにでも少し時間をいただければ、そういった意見交換とか、直に話してみたいと言われましたので、ちょっと可能であれば受け入れてもらえないかなということをお伝えします。

今日は、僕はその辺で。勝手なんですけれども。僕はこれまで数回、勝手に応援する会みたいな感じでしゃべらせてもらったけれども、実際に生産者、やりたいという人達から直接お話を聞くのが一番だと思うので、そういう機会を作っただけならば、無用な出しやり方はしないほうがいいのかなと思ひまして。

○委員長（安藤辰行君） 次回は。

○議会事務局次長（成田真介君） 定例ですと8月9日水曜日あたりは予定。

○委員長（安藤辰行君） 8月9日。

○議長（千葉 隆君） 一般会議形式で。団体から要望書とか。

○委員（三澤公雄君） 要望書とか様式があつて僕もそれ失念していたので、その基準に沿って申し込みしてもらおうかなと。

○議長（千葉 隆君） それで手続き。

○委員長（安藤辰行君） そのほうがいい。

そしたらこれで今日は終わります。

[閉会 午後 0時43分]